



じんけんを「他人ごと」から「自分ごと」へ

OYA OYA 通信

学びのホームグラウンド じんけん楽習塾

2020年度ルール

参加
尊重
守秘

マスクにまけない
楽しく
自分のペースで
ひとことしゃべる
時間をわけあう
しつこく追求しない

報告 6/17 部落差別と若者たち
神村早織(大阪教育大学)

2020年度2回目のじんけん楽習塾は部落差別がテーマでした。神村さんからは、大阪教育大学での学生たちとの出会い、学生たちの自主活動などの話がありました。人権教育を受けた学生も中にはいますが、教えられずにきた「空白の15年間」に小中校をすごした学生が多数を占めるそうです。そんな中、学生の自主活動の報告が、大学生のおだちゃんからありました。部落問題を投げかけることによって、自分と部落問題との出会い直しが始まっていて、求めている学生もいるという言葉が印象に残りました。(文責ぼんみ)



みんなのふりかえり

■熱心に部落問題に向き合っている若い学生の意見が聞いて良かった。自分のためになることだから、学びの場が必要という意見が印象に残った。

■三重県の調査すごいなあと思いました。世代間のギャップが大きく、部落問題との出会いが若い人に少しになっているのが、気になりました。部落差別との出会いがないのかなあ。おださんの話と大学での取り組み素晴らしいなあ。20名の同実組(※大阪同和教育推進校実習生組合)これからも発展してほしいです。必ず教員になってほしいです。(竹内たつお)

■今回、初めてじんけん楽習塾に参加させていただきました。神村先生の内容も充実していて、しかも新しい情報も多く、学びが深かったです。特に私は教師をしています。同じ教師の中にも空白の15年の間に育って教師になった方もふえてくると思うので、一緒に学んでいけたらと思います。(HAL)

■「こわいところや」「そっちは行きが悪い」という人こそ、部落問題学習があるとあらためて思いました。

■「空白の15年間」に子ども時代を過ごし、そのままになっている人たちの何と多いことか。そのことで、弱さを認められない、認め合えない息苦しさを感じるようになってしまったのではとってしまう。あいちゃんやおだちゃんたちの取り組みが、ずっと受け継がれていきますように。

■リアルな学生の部落問題の「知っている知ってない格差」など知ることができてよかったです。ジャーナルの学生(当事者)の「自分の地域は人が温かいところや」っていうことが心に残り、みんなに共通する人とのつながりの中で支え合える人権の尊重の原点だとあらためて思いました。

■教育現場では部落問題をどんどん進めていっていると感じていたが、全く逆の感想(大学における人権学習の実施)であることにおどろきました。また、「タイコ作った」「解体新書」したで終わっている現実も驚きました。

■大教大は教員養成系大学なので、人権教育は必須だと思うけど、どんどん薄められてると思っています。今日の学生の取り組みは希望だと思った。あと、被差別で

いるということは、人間であるということは、あたたかいだけでなく、いけずなところもたく





さんあります。私もムラで暮らしたので、うれしい経験もあるけれど、そうでないこともありました。それをないことにせず、乗り越えてい

くことが大切だと思いました。

■同和教育を学ぶことの困難さを実感しました。同和教育は水面下にひそんでいるので、波風が必要。同和教育＝人間教育だと思う。「心の中のはかり」を水平に保ちたいものです。

■自分も「空白の15年間」の中で学生生活をすごしていたことを学べた。見えにくくなっていても「差別は無くなっていない」ことは忘れてはいけないと思った。

■私自身「空白の15年間」の間を児童生徒、学生として過ごしたのだと今日初めて知りました。様々な方面から、聞いたりしたのはことがあるかな～って感じの知識しかなかった。改めて、深く真剣に取り組む(学習)ことが必要だと感じた。実際に会うことの大切さ、知識として知っているだけではダメだと思った。

■若者の中でも知っている子と知らない子に大きな差があることが改めて認識できました。知らない人にどう伝えていくのか？これからの大きな課題だと思います。

■部落差別がよくないのは明らかで、どんどん差別が見えにくくなっていく現状で「部落差別はなくなった」と思ってしまいがちです。だからこそ、子どもや保護者、地域の方たちのくらしや思いをどこまで自分ごとにしていくかを大切にしていきたいです。そして、出会えばいいではなく、どんな出会いをめざし、教育の中でどう意味を持たせていくか、自分自身がしっかりと考え取り組みをつくっていくべきだと思います。むらの子どもたちが堂々とふるさとを語り合える社会をあたり前に。

■・良い経験をさせていただきました。・部落差別のことを知っている、知らないが身近にいることを感じました。・教育の一環として取り組むことは将来に向けて、大切だと思いました。

■改めてしっかりと話を聞くことができて、もう一度考える機会を与えて頂いた気がします。ありがとうございました。 ♪知らないは はすかしいぞ日本人♪

■・学生時代を思い出して、とても懐かしく感じました。頑張っている学生さんすごい。体を壊さない程度に…応援しています。・空白の15年間“出会い”とはすごく大切なものだとして再確認しました。たくさんの出会いを子どもたちに作っていきたくて思いました。(大人たちにも…)様々なきっかけの中でそれぞれの自分の内ですとんと落ちていくものがあれば良いな。

■「見ようとしなから見えない」を実感しています。それと、最近思うのは部落差別と在日朝鮮人差別がいま最も「見えにくい」「扱いにくい」もの扱いされていてかつ、もっとも日本的なウチ／ソト意識とか、リスク回避、同調圧力を考えるカギになる課題だなあと考えています。がんばりますー(外国人問題はたぶん「人権」ではなくて「国際交流」とか「異文化理解」とか「日本語指導」とか…で扱われていて「人権学習した！」感がないのでは？と思います…。)

■部落当事者の親世代や祖父母世代は、「部落の話はしないで」という人もいます。だから部落問題に取り組む先生もそれぞれに大変だあとと思いました。

■私は当事者ですが、子どもの頃に【空気の変わる瞬間】は何度か遭遇しています。大人は直接言いません。素直な友達から「○○ちゃん(私)と遊んだらアカンねん」とか、「○○ちゃん、家呼んだら怒られるねん」と言われたり。親は反対されて結婚してるので、大きい家を建てて見返すのに必死でした。私の子どもの頃の同和教育は、「負けたらアカン。立ち向かえるよう勉強しとき。強い意志を持とう」という印象で、とても窮屈だった記憶があります。窮屈すぎて、早く地元を出たい！そればかり考えてました。私は自分の出身地区を嫌いでも好きでもありません。ましてや「こんないい所で、こんないい人たちがいるねん」なんて想像もつきません。この差はなんなんやろうと考えさせられました。安心して暮らさせてたかの差かな…

連絡

もし参加者の皆さんで宣伝したいチラシ等ありましたら、ご持参ください。毎回ふりかえり用紙をくばります。後でメールファックスでもいいので送ってください。お願いします。通信に反映させたいと思います。(公開だめなものはオープンにしません)

写真を撮影しますが、OYA OYA通信、八尾市人権協会のホームページなどで使用する場合があります。なるべく個人が特定しにくいものと考えていますが、困るという方は事務局に申しつけてください。